2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

《この小説は大正時代の初期を時代背景としています。そのころ日本の統治下におかれていた台湾で小学校生活を送っていた日本人の少年が主人公です。》

進級期がきた。少年は当然のような顔で級の*総代にえらばれ、校庭のはずれにずらりと並んだ棟割長屋の一つである受持教師の家へ行って、進級式での作法や進退を教えられた。教師は茶っばい和服を着て出てきて、少年を狭い玄関の土間に立たせて練習をさせた。

「それから三步すすんで礼をして」と、教師が言った。

三步すすむと、*あがり櫃かまどに中腰なかこしになつてゐる教師との間は、もう何寸もなかった。礼をすると、少年の頭はいやでも、教師の着物の膝ひざがしらにつかえた。少年は教師の体臭をかいだ。煙草たばこのやにと、もう一つ、何かいいようなないじめじめした臭においがした。少年はそれを絶えず石鹸せっけんの香りをぶんぶんさせている、おしゃれな父親ちちのにおいに思おもいくらべた。そして、きつとこの先生は不幸せなのだ、と思った。①同情と一しよに、不快さがこみあげてきた。相手にたいする不快さではない。同情という心理にたいする先天的な不快さであった。

修業式の五日ほど前に、祖母が息を①た。持病はなかったから、つまり老衰死である。その死顔しがおも、また死そのものとの接触感も、ともに少年の意識にのぼらなかつた。父がおいおい手ばなしで、まるで子供のように泣きながら家の中をうろうろしているのを、少年は何か不思議な見物を見るように眺めた。お別れに、割箸わりばしの先へつけたガーゼで祖母の口を拭ふかされた時にも、土色にすばまって開ひらいてゐる老女のしなびきつた唇くちびる。醜みにくいと感かんじただけに過ぎない。もう一つ、そんな醜みにくいものを半公開の儀式にまで仕立てる大人たちの愚かさに、へんな軽蔑の情をおぼえただけにすぎ

ない。少年はむしろ祖母に同情した。彼女の死への同情ではなかったけれど。

そんな少年にとって、^②もし何か死の実感に似たものがあつたとすれば、それは祖母の死ぬ日の朝から(臨終は夕方だった)、近所の大きな黒犬が庭へまぎれこんで来て、前脚を*縁側(えんがわ)にかけながら、しきりに遠吠え(とおほ)をしたことである。いくら追われても水をぶっかけられても、犬は出て行かなかつた。ますます牙(きば)をむきだして吠えさかした。少年は、いよいよ祖母が息を^①たあとで、あの犬が見ていた何か人間の目には見えぬものが、つまり死なのだと思つた。

葬列も葬式も、あらゆる大人たちのする儀礼の例にもれず、長たらしく退屈な、無意味な行事の連続にすぎなかつた。少年は南国の春の砂ぼこりの中に、小さな*紋付羽織(もんつきはおり)を着せられて、みじめなさらし者にされている自分だけを意識していた。腹だたく、口惜しかつた。

少年は、あの吠えさがる犬が目に見ていたものが死なのだと、漠然と感じてはいたけれど、これにはもちろん、想像のへだてでも言うべき一皮かぶつた気持ちがあつた。少年が祖母の死を、はっきり現実として受けとつたのは、いよいよ修業式が済んで、小さな免状と大きな優等証書の二枚を筒巻(つつまき)きにして、ほんやり家に帰つて来たあとである。父は役所(やくしょ)だつた。家には母だけがいて、その筒巻(つつまき)きを手にすると、ちよつとひろげてみて、「そう」と、にこりともせず、^③咳(せき)くように言つた。そして、また巻いて、父の机の上に置いた。

少年はもちろん、ほめられようと思つて帰つて来たわけではない。だいたい少年自身にしてからが、その日のことをさつぱり嬉(うれ)しいとも誇(こ)らしいとも思つてはいない。勝(かち)気で、無口(むくち)で、そのくせ胸(むね)の奥(おく)に何か少年にはうかがい知ることのできない情愛(じやうあい)や知恵(ちゑ)を、じつと包みこんでいるような母の性格も、少年には分かりすぎるぐらい分かつている。そういう母を、少

年はたしかに心のどこかで愛してはいるのだが、その一方やはりその母に、一種(いんしゆ)の嫌悪(けんあく)と反発(はんぱつ)を、たえず感じずにはいられなかつた。自分自身の影に、無限(むげん)に愛情(じやうじやう)を感じる人もあれば、無限(むげん)の嫌悪(けんあく)をいだく人もある。その中間(ちゆうかん)の人は極めて珍しい。少年は明らかに後者(こうしや)の型(かた)だつた。少年は母のなかに、自分の影(かげ)を嗅(か)きつけていたのである。……そんな母から少年は「そう」という眩(くら)きのあとに「よかつたね」という言葉(ことば)が添(そ)わることを、最初(さいしょ)から予期(よき)していたわけではない。しかしその日(ひ)だけは、何か無性(むじやう)に、それに類(たが)する慰(なぐさ)めの一言(ひとこと)が欲(ほ)しかつた。少年は疲(つか)れていたのである。死(し)や葬式(そうじ)や修業式(しゆぎやうじ)が、たてつづけに続(つづ)いたのである。少年は甘(あま)えたかつた。ほんの少し。ただ、ほんの少し。……

少年は自分の勉強机(べんきやうき)の前(まへ)へ行(い)つて、ゆつくり袴(はかま)の紐(ひも)をときながら、ふと祖母(そぼろ)のいない空虚(くうこ)さを、焼(や)けつくように頭の隅(すみ)に感じた。祖母(そぼろ)ならば、「よかつたのう」と言(い)つてくれるばかりか、やせ細(こ)つたカサカサの手(て)で、頭(あたま)を撫(な)でたり、何かその辺(へた)をごそごそいわせて、ほうびを出(だ)してくれ、撫(な)でられたり、ほうびをもらつて^③嬉(うれ)しそうな顔(かほ)をつくろうのは、少年にとつて迷惑(めいわく)なことだつたが、それをしてくれる人は、五日(ごにち)ほど前から、突然(とつぜん)いなくなつたのだ。あの隠居(いんきよ)部屋(へや)には、たしかに誰(だれ)もいないのだ。……この不在(いざ)の感(かん)覚(かく)が、痛(いた)いほど少年(せうねん)をしめつけた。

そうした少年(せうねん)の心(こころ)の動き(うご)きは、祖母(そぼろ)への追慕(しゆぼ)などというものとは、およそ縁(えん)のない、裏(うら)はらなものに違(ちが)いなかつた。そこには一種(いんしゆ)の*罪障(ざいじやう)感(かん)と自責(じせき)の念(ねん)が、黒々(くろくろ)とよんでいた。祖母(そぼろ)は、……あんなにも自分が甘(あま)えぬき同時にまた避けぬいた祖母(そぼろ)は、自分(じぶん)から何(なに)の感謝(かんしゃ)のしるしも受けとらずに、黙(もく)つて死(し)んで行(い)つたのだ。この^④取(と)り返(かへ)しのつかないものが、つまり「死(し)」というものなのだ。

少年(せうねん)は、^④この空虚(くうこ)感(かん)と、自分(じぶん)への怒(い)りとに、どうにも堪(た)えられなくなつて、縁側(えんがわ)に寝(ね)そべつたまま、ふと口(くち)に出(だ)して見た。

「お母さん……お祖母さんは？」

「え？」

座敷の暗いところで、何か片づけ物をしていた母は、^b「げんそうに少年を見た。そして、哀れむようにじっと見つめた眼を、またよそへ」^②た。少年はその瞬間、しまった、と思った。ちらりと目にうつった母の眼のうるみのなかに、少年は明らかな誤解の影をとらえたのである。

「ううん、そうじゃないの……」と、少年は打ち消そうとして、言葉につまった。

「何が？」

母は小声で聞き返して、また哀れむように少年を見た。

〈神西清「少年」より〉

(注) 総代＝進級式でクラスの代表として表彰される生徒。成績、生活態度ともに優秀な生徒が選ばれた。

棟割長屋＝一軒の家を壁で仕切っていくつかの家族が暮らしている住居。

あがり框＝玄関など、家のあがり口の板張りの床。

縁側＝住宅などで部屋の外側に設けた板敷き。

紋付羽織＝背や袖などに家紋のついた礼装用の和服。

罪障感＝祖母が成仏するさまたげとなる悪い行いをしたという思い。

(1) ①・②に入る動詞をそれぞれ適切な活用形にして、ひらがなで書いて答えなさい。ただし、①は四字、②は三字とします。

(2) 線 a 「裏はらなもの」・ b 「げんそうに」は本文中ではそれぞれどのような意味で用いられていますか。次から最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「裏はらなもの」

ア 矛盾しているもの イ 関係がないもの

ウ 非人間的なもの エ 本音を隠したもの

b 「げんそうに」

ア 疑り深そうに イ 不愉快そうに

ウ 悲しそうに エ 不思議そうに

(3) 線①「同情と一しよに、不快さがこみあげてきた」とありますが、その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 貧しく衛生的ではない環境に暮らす教師に同情するとともに、いやな臭いへの不快さを自分でも抑えきれない気持ち。

イ 貧しい暮らしをしている教師に同情するとともに、そのように思う自分の心のはたらきそのものを不快に感じる気持ち。

ウ 貧しい暮らしの中で生活に追われる教師に同情するとともに、相手を見下すような自分の思いを不快に感じる気持ち。

エ 貧しさの中で身だしなみに配慮できなくなった教師に同情するとともに、貧しさへの不快を感じずにはいられない気持ち。

(4) 線②「もし何か死の実感に似たものがあつたとすれば」とありますが、この時の「死の実感」にふさわしくないものを本文中の線ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

(5) 線③「嬉しそうな顔をつくろう」とありますが、その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 祖母と喜びを分かちあいたくて心から嬉しそうな表情をする。

イ 祖母が気を悪くしないように無理をして嬉しそうな表情をする。

ウ 祖母にもっとほめられようとして大げさに嬉しそうな表情をする。

エ 祖母に決して本心を悟られないように嬉しそうな表情をする。

(6) 線④「この空虚感と、自分への怒り」とありますが、その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大切に思ってきた祖母が突然亡くなってしまうことへの驚きと、

これまで自分に注がれてきた愛情への感謝をもちや伝えるすべさえないくした自分への怒り。

イ だれでもやがては死んでしまうのだという人間の運命を知って感じたまなしさと、そのことにうろたえてしまう未熟な自分への怒り。

ウ いろいろなことを心から喜んでくれた祖母を失ってしまったことのためならなさと、生前には祖母の愛情への感謝を少しも伝えることがなかった自分への怒り。

エ 家族の一員がいなくなってしまうことによる埋めようのない欠落感と、自分に豊かな愛情を注いでくれた祖母の死に対してまったく無力であった自分への怒り。

(7) 「少年」にとって、「母」と「祖母」は対照的な人物として捉えられています。「少年」にとってこれらの人物は、それぞれどのような存在ですか。その違いがわかるように、本文中の**ことば**を用いて、六十字以内(句読点や符号も字数に数えます)で書いて答えなさい。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、*丹後国に老尼ありけり。地藏菩薩は暁ごにありき給ふといふ事を、ほのかに聞きて、暁ごに、地藏見奉らんとて、^①ひと世界をまどひありくに、博打のうちほうけてゐたるが見て、「尼公は、寒きに何わざし給ふぞ」といへば、「地藏菩薩の暁にありき給ふなるに、あひ参らせんとて、かくありくなり」といへば、「地藏のありかせ給ふ道は、我こそ知りたれ。いざ給へ。あはせ参らせん」といへば、「あはれ、うれしき事かな。地藏のありかせ給はん所へ、我をゐておはせよ」といへば、「我に物を得させ給へ。^②やがてゐて奉らん」といひければ、「^③この着たる衣、奉らん」といへば、「いざ給へ」とて、隣なる所へゐて行く。

尼、悦びて、急ぎ行くに、その子に、地藏といふ童ありけるを、^④それが親を知りたりけるによりて、「地藏は」と問ひければ、親、「遊びにいぬ。今、来なん」といへば、「くは、ここなり。地藏のおはします所は」といへば、^⑤尼、うれしくて、つむぎのきぬをぬぎて、取らすれば、博打はいそぎで、取りていぬ。

尼は、地藏見参らせんとてゐたれば、親どもは心得ず、^①と思ふ程に、十ばかりなる童の来たるを、「くは、地藏よ」といへば、尼、見るままに、*是非も知らず、ふしまるびて、拝み入りて、土にうつぶしたり。童、*すはゑを持って、遊びけるままに來たりけるが、そのすはゑして、手すさみの様に、額をかけば、額より顔のうへまでさけぬ。さけたる中より、えもいはずめでたき地藏の御顔、見え給ふ。尼、拝み入りて、うち見上げたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して、拝み入り参らせて、やがて極楽へ参りにけり。

されば ^②。

〔宇治拾遺物語〕より

(注) 丹後国みやま 京都府きょうとの北部。

是非も知らず 夢中になつて。

すはゑ 細くまつすぐ生えた若枝。

(1) — 線①・②の口語訳として最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①「ひと世界をまどひありく」

ア 世界中を探して歩く

イ あたり一帯を夢中で歩く

ウ 世の中の様子を知って取り乱す

エ 世間から相手にされずうろたえる

②「やがてゐて奉らん」

ア すぐにおつれ申しましょう

イ そのうち行ってみましょう

ウ いつかまたお返しいたしましょう

エ 今のうちにもらっておきましょう

(2) — 線③「この着たる衣」を具体的に表現したことを、本文中から六字以内で書き抜いて答えなさい。

(3) — 線④「それ」とは、だれを指していますか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 尼 イ 童 ウ 博打 エ 親

(4) — 線⑤「尼、うれしくて」とありますが、どんなことがうれしいのですか。現代語で書いて答えなさい。

(5) ①には、この時の親の気持ちを表すことが入ります。次はその口語訳です。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア どうしてこの場所がわかったのだろう

イ どうしてこの子に会おうと思うのだろう

ウ どうしてあの衣を脱ごうと思ったのだろう

エ どうしてあの男と知り合いになったのだろう

(6) ②に入る内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人をうらやんだりしてはならないのである

イ 心に深く念じさえすれば、仏もお姿をお見せになるのである

ウ 忍び歩きとは言つても、いやしい者の所には立ち寄つてはならないのである

エ その観音かんのんさまをお祈り申し上げると、他国の人でもご利益りやくが必ずあるというのである